

---

# 赤い糸

ゆうき

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

赤い糸

### 【著者名】

ゆづや

202930

### 【あらすじ】

「ぐぐぐ平凡な日常を過ぐ」していた、悠。そんな悠の日常をぶつ壊したのは、金髪碧眼の外国語教師？平凡な女の子が、幸せを掴む恋の物語。

ねえ、

もしも、運命つていうものがあつて、

赤い糸なんでものがあつたら、

ぐぢやぐぢやに絡まつていても、その糸がどんなに細くても構わな  
いから、

どうか私と貴方が、その糸で繋がつてありますよつじ。

赤い糸 アカイト 第一章

これは、ちょっと天然で、でも優しい先生と、  
ごくごく普通な私の織りなす、

甘くて切ない、恋の物語。

「そうそう、外国語の。吉井先生居なくなっちゃったから。」

「新任？」

「ねえ、新任来るんだってやー、」

新作のポッキー、抹茶つてなかなかおいしいなあ。

そんな事を考えていたら、春香がそんな事を言い出した。

「げつ、外国語、？」

思わず嫌な声が出る。だつて、英語から始まって外国語は全滅だもん。

私の平均点を著しく下げる憎き教科。いや、授業中寝ちゃつてる私も悪いんだけど…。

ともかく、そんな教科の新任の先生が来るとなつては、私もあまりいい気はしない。

「うあー、嫌すぎる。。」

「ははっ、まあ確かに悠は外国語苦手だからね、」

「春香は良いなあ、まんべんなく適当に出来て。」

「努力のたまものよ、馬鹿。」

おでこをこつんとつたかれ。全く、すぐ手が出る女の子はモテないぞ！

まあ、仕返しに一発たたき返してやつて私も色氣がなこつちやないんだけども。

その後すぐにお菓子の話になっちゃって、結局どんな先生が来るのかつて話にはならなかつたけど。

あー。どんな先生が来るんだろ？…。

「じゃあね、春香」

「またあしたー。」

そう言つて分かれ道で手を振つて春香に挨拶をすれば、私は自分の家に帰宅するべく足を進めた。

私は今絶賛一人暮らし実行中だ。マンションに住んでいる。学校のある街の方は結構賑やかだけど、私の住んでいるマンションの近くは自然豊かで河とか流れていて、結構綺麗でいい感じ。

今日は何となく気が向いた方から川の方へ行ってみた。  
ごつごつとした歩きにくい岩場を越えると、私のお気に入りの川に着いた。

でも、今日はそこに先客がいて。  
振りかえった、彼は

天使みたいに、きらきらと輝く金髪を持つた外国人。



振り向いた彼と、目があつた。  
とっても綺麗な、空の青

。

見た目は20代後半ぐらいいだろ'つか、  
顔は誰が見ても綺麗といつぐらこ整つていてる。  
きょとんとしていてもその表情はどこか柔らかく、優しい雰囲気を  
醸し出している。  
体はすらりとしていて細い感じ。男臭さは感じさせず綺麗な印象を  
持たせる。  
仕事帰りなのだろうか、ワイシャツにネクタイといつ姿だ。

で、ここで問題。

実は私、生まれてこのかた外国人さんと相性が悪いみたいですね。

一年の時外国語担当だったレイ先生。43歳、男性。  
にっこり笑顔が素敵な方。だった。でもスバルタだった。  
特に勉強のできない私はそのスバルタの標的になつたようだった。  
毎日補習させられて放課後は毎日英語。私の英語嫌いに拍車がかかつたのは言うまでもない。

二年生の時外国語担当だった吉井先生。吉井ミシェル先生。32歳、

女性。

日本人男性と結婚してこっちにやつてきたらしいダイナマイトボディーな美しいお姉さん。（おばさんというと悪魔が降臨する）が、しかし、その正体はできの悪い生徒をいたぶるDOS教師。標的にされたのは言つまでもない。でも私の外国語の平均点は上がらなかつた。なんだだ。

（ちなみに、授業中寝てるお前が悪いんだろうとかいう突つ込み話の方向で。）

もう一人とも英語でしか喋らないもんだから、英語を聞くと軽く叫んじやうというかなんというか…。

とこうわけで私、軽く外人恐怖症です。

さあや、と部陰に隠れて様子をうかがう。

相手は、そんな私にキヨトンとしたままで動かない。

そんな状況が何分続いたらうか。見つめあつてるって言い方は良いけど全然雰囲気も無いしむしろ緊張感に満ちたものだ。

そんな状況が嫌になつて私は恐る恐る部陰から出てきて外国人さんに声を掛けた。

「あ、あの、…、外国人さん、ですよ、ね…？」

外国人さんはキヨトンとした表情から、  
みを浮かべて口を開いた。

「I am an Englishman. 又は、  
British」

、ああ、完璧に死亡フラグが立ちました。

この状況で私に残された選択肢は三つ。

一、叫ふ。一、叫ふ。三、叫ふ。  
だ。

思つたり言ひで逃げ出やうと睡を返して走り出した。

やばいやばい！

ごめんよ私は日本語しか喋れないんです道を聞かれてもさうといひにやつてダッシュで逃げてたと思つ。

外人さんは目を丸く見開いて少し固まつた後、あわててこつちに追いかけてきた。

でもまあ、男女の足の速さなんて歴然として、プラス足場が悪かつたという事もありあつたりと手を掴まれました。

「いやああああああ、ひよ、離してください離してくださいいじめんなさい日本語しか喋れませんのーいんぐりつしゅー」

「ややつ、いのんね、驚かせへー。せひんと日本語喋れるからね、僕……！」

。アーティスト五郎

よかつたあー。ちよつと安心。

「あー、す、すみません、私英語苦手で…、聞くと体が拒否反応起  
こじて…！」

「うん、気にしないで。分かるよ、そういう子がいるもんね。」

にっこりと相手が笑つた。あ、なんだこの人いい人だ…。  
ホツとして私も緊張の糸がほどける。

「すみませんでした、取り乱したりしちゃって。日本語、お上手で  
すね、びっくりするぐらい。」

にこりと笑みを浮かべて、そう言つ。  
日本語が喋れるなら逃げる理由も無いし。  
普通にいい人だし。  
いやあ、喋つてみるものだなあ。

「いや、良いんだよ。びっくりするのは仕方ないんじゃないかな?  
ほら、僕典型的な外国人の容姿だから。」

確かに。びっくりさせやがつてこの野郎とは思つも、  
イケメンにそんな風に言われたら…、許すしかあるまい。  
しかし、いわれてみれば確かに典型的な外国人の容姿だな。 金髪碧  
眼。

金髪がふわふわしててお口様色…。あー…、これは…

「そうですね、とっても綺麗です。触つてみてもいいですか……？」

言わすにはいられない。だって、とっても綺麗なんだもん。外人さんはキヨトンとした表情を浮かべた後、にっこりと笑った。

「どうぞ、こんなでよければ。」

そつとつてもらえれば、私は彼の髪にそつと手を伸ばす。

おおへ、近寄つてみると背が高い……、あ、ちょっと、屈んでくれた。

うわあ……、もううとうらだ……。シャンプー何使つてるんだ羨ましきるが。

そんな彼の髪をさらさらと梳くように撫でる。

なんだか、気持ちが良い。自然を笑みが浮かぶ。

「すうじく綺麗です……。サラサラしていて気持ちいい。」

「ありがとうっ！ねえ、僕も撫でてみていい？」

緩く首をかしげる彼。

「え？ はい。こんなでよければどうぞ。」

にっこりと笑みを浮かべて返事をする。私の髪なんて安いものだし……まあ、確かに毎日ちゃんとお手入れしてるし腰まで伸ばしてると、染めて足りはしないからなー。

黒髪は珍しいのだろう、彼は興味津々、といった感じに私の髪に手を伸ばす。

「すゞい。綺麗だね。」

「貴方の方こそ、ふわふわしててお口様色で、とっても綺麗です。」

「ははつ、有難う。」

についつと笑みを浮かべられた。

気づいたら、頬に柔らかい感触。

え？

そこまでは良かったんだ。

彼は何を思ったのだろうか、ちょいちょいと手招きをした。  
何だろうと少し顔を寄せたら、顔が近付いてきた。

ポカんとしている間に相手の顔は離れて行つて。

「褒めてくれてありがとうね！thank you！」

笑顔の彼が、そんな事を言つたが、私の耳には入らない。  
さつき前でのああこの人いい人だな、ぼわーん、つていう気持ちが  
急激に冷めていく。

そして、私を占めていくのは怒り。

相手はそんな私に気づかずにこにこしている。

じろ、と相手を睨んでから、思いつきり相手のほっぺをぱちーんと  
叩いてやつた。

「私のほっぺはそんなに安くないんですよ馬鹿！」

そう言って走り去る。

いつたい何なんだあの失礼な変態外人は！



「あいつは、…それでなに？逃げて帰ってきたわ！」

「わー、ひー、いー、じー、なー、こー、つー！」

昨日の事を話したら春香は大笑いした。

「酷くない！？ はつほつペチューが奪われて悲しんでる親友に対して！  
この仕打ちはひどいんじゃありません！？」

「いーじゃん別に。 その人美形だつたんでしょう？ 儲けもんだと思つておけばさあ。」

「そんなんふつに思えないよ、！ 始めては好きな人がいいと思つてたのに…！」

「おおよよ、と泣き真似をする。 そんな私の頭を春香はべしつと叩く。  
相変わらずの暴力女だ。 こんなこと本人に言つたらふるぼつ…」  
なんでこいつ見て笑つてんの見透かされてそつて怖いんですけど…」

「まあとりあえず、そんな不審者とはもう会つ事は無いこと思つから、  
安心なんだけどね？」

「うー、もつあの河原への近付かないし。  
あんな人と会うのはこれが最後だらう。」

「どうかねえ。人の縁って妙なところがあるからねえ、どうなるかは誰にもわからないよ。」

「不吉なこと言わないでよ、一もつあったら次は必ず同じことやるんだから……」

全く、！あんな変態にはもう一度と会いたくない。

「はいはい。じゃあ私はホームルームをぼるから行くね。」

「あー、つょーかい。こつてら。」

教室から出てこべの背をひらひらと手を振りながら見送った。

あー、今日の一時間いつなんだっけ……。

そんな事を覚えてきたらばーん！と扉が開かれた。  
「おー、エーッ、あー、なんだなんだ、春香？」

バタバタと駆け寄つてくる彼女の表情はなんていうか、ぽわーんとしていて、乙女っぽい、つていうの？

「ねえ聞いて聞いてー。」

「な、なこなこなこ、じつしたの、ー？」

「すず」と近寄つてくる春香の勢いに押されつつも、言つた。

「INの前外国語の先生が来るつて言つたでしょ。」

「え？ ああ、そんな話したようなしてなかつたような……。」

あんま覚えてないや。

「もう、ばかね！ でね、さつき廊下で見かけたんだけど、すりINへ  
格好良かつたのー。」

……ああ、春香、君、面白いだつたな。

「それは良かったね、」

「金髪碧眼でさあ。あれは外国人だよきっと、！」

そりゃ外国語担当なら外国人だろうな。

「あ、ほら、来た！」

振り返った先には、昨日の彼。

神様、  
私なんか悪いことしましたつけ？



私は、変態が嫌いだ。

というか、無駄なスキンシップが嫌いだ。

女の子同士でべたべたするのはまだいい。だって同性だしね！

でも、男の人、特に年上に触られるのは嫌だ。  
なんだか…、生理的に受け付けない。鳥肌が立つ。

というわけで私、この外人男、受け付けません。

Ah yesterday's lovely blog!

うあああああ、――鳥肌立つてせりやつたじやないかあああああ  
あ――

「『めん』『めん』、英語は苦手なんだつたね。」

昨日の事は何も気にしていないよ！という外人男のははつ、という爽やかな笑みにさえ殺氣があふれてくる。

「乙女の純情踏みこじりやがつてー！」

初ちゅ  
だつたんだぞ！ほつペだつたけど！

「ちょっと、そんな話聞いてないわよ、この間に新任の教師とやつたのよー。」

「ちつがあああうーそんな意味じゃないつてば！」

「あ、そりなの?詰まんない。」

「人の不幸話を喜劇に変えないでよ!」

「煩いわねー、やつと処女脱出かと思ったのに。」

「*Cute girl*」はショジョなのかい?」

「ええ処女ですよ悪かつたですねえ…………って勝手に割り込んでくるな近寄るなあつち行けばかああああああああー!」

もひ、なんの子の男!-



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0293o/>

---

赤い糸

2011年1月7日12時57分発行